レオン・ワルラス自伝資料

御崎加代子

Center for Historical Social Science Literature Hitotsubashi University

目 次

1.	自伝ノー	-			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		 ••••••			6
	第1部.	1834—	1870	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			•••••	 ••••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	7
			1892									
	第III部。	1892—	1904	•••••		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			 •••••	• • • • • • • •		15
	第IV部。	1904	1909	• • • • • • • • •	• • • • • • • •	•••••	•••••		 •••••	• • • • • • • • •	•••••	19
												,
2	リュショ	ョネレ科	学的社会	主義			• • • • • • • • •		 			24

レオン・ワルラス自伝資料

御崎 加代子 訳

[訳者まえがき]

ここに訳出したのは、レオン・ワルラス(Léon Walras,1834—1910)の二つの自伝資料すなわち、1.「自伝ノート」("Notice Autobiographique", Correspondence of Léon Walras and Related papers, edited by William Jaffé, vol. I, Amsterdam, 1965)および、2.「リュショネと科学的社会主義(1909年経済学者生活50周年祭記念講演)」("Ruchonnet et le socialisme scientifique", Jubilé, 1909, Auguste et Léon Walras, Œuvres économiques complètes, t. VII, Mélanges d'économie politique et sociale, Paris, 1987)である。

1.「自伝ノート」について

レオン・ワルラスの名は、限界革命の担い手として、一般均衡理論の創設者として、経済学史 上余りにも有名であるが、残念なことに彼に関する本格的な伝記はまだ書かれていない。

ワルラス研究の第一人者であるウイリアム・ジャッフェ(William Jaffé, 1898-1980)は、ワルラスの伝記の執筆を計画していたにもかかわらず、それを完成しないまま他界した¹⁾。本稿で最初に訳出した「自伝ノート」は、そのジャッフェが生前に彼の代表的な業績であるワルラスの書簡集の冒頭に収めたものである。ジャッフェは、ワルラスがローザンヌ大学を退職した直後から死の直前までに書きためていた「自伝」に関する草稿を、この四部構成の「自伝ノート」として編集したのである²⁾。

このような状況からも明らかなように、この「自伝ノート」はワルラスの全生涯を正確に伝える数少ない資料のひとつである。しかしこの資料がもつ真の意義は、そのような「正確さ」だけにとどまらず、それが何よりもワルラスの生涯と業績に対するワルラス自身の「主観的」な評価を生々しく伝えているという点にあると考えられる。

そして本稿において, その次に訳出した「リュショネと科学的社会主義」もまた, まさにこのような点において「自伝ノート」を補完するものである。

2. 「リュショネと科学的社会主義」について

「自伝ノート」の本文は、1908年、ワルラスの経済学者生活50周年祭を催したいというローザンヌ大学の意向をワルラスに知らせに来た同僚たちに、ワルラスが「リュショネと科学的社会主義」。という論文の草稿を読んで聞かせるというところで終わっている。ワルラスは実際に1909年6月10日に行われたその50周年祭に、これと同じ題で講演を行っており、本稿で訳出した「リュショネと科学的社会主義」のテキストはその講演録である。

従ってこの「リュショネと科学的社会主義」は「自伝ノート」の続編として読むことが出来るのであるが、この講演録の意義はそれだけに止まらない。その内容は、ワルラスが「科学的社会主義者」としての自らの生涯と業績を総括するというものである。題名にあるリュショネがは、ワルラスをローザンヌ大学に招聘した人物であり、ワルラスの学説の良き理解者であった。ワルラスは、リュショネが1870年ワルラスをローザンヌ大学の専任教授にした時に行った演説をここで引用しつつ、生涯をかけて完成したワルラス経済学の体系を解説し、「ローザンヌ学派」の設立者としての、そして「科学的社会主義者」としての自負を改めて強調するのである。

すなわちこの講演録からは、自らを生涯「科学的社会主義者」として疑わなかったワルラスの強い信念、ワルラスの生涯と業績に対するワルラス自身の「主観的」な評価がさらに生々しく伝わってくるのであるが、さらに重要なことには、ワルラスの意識の中では、彼の経済学体系と科学的社会主義の思想が矛盾するどころか、密接不可分なものであること、数理経済学者ワルラスと社会主義者ワルラスは表裏一体であることが、ここで確認出来るのである。

3. ワルラス経済学と「社会主義」

ところで,以上のようなワルラスの「社会主義者」としての自己評価は,従来の研究史においては余り重視されて来なかった部分である。

ワルラスの経済学は、純粋経済学のみによって語られ、評価され、これまでのワルラス研究は、 純粋な経済理論としての一般均衡理論の解明と発展の研究においては、豊かな成果を生み出して 来た。しかし、その一方で、彼の「社会主義者」としての自負は全く無視されるか、あるいは問題にされたとしても、彼の純粋経済学あるいは一般均衡理論の形成過程とは殆ど無関係なものと して、消極的な評価しか与えられて来なかったのである。そして同時に、ワルラス自身が一般均 衡理論にこめようとした政策的意図や社会哲学などを、同時代的状況から解明しようとする試み も、日本においても世界においてもまだ十分になされていないのが現状である。

そこで、この「科学的社会主義者」ワルラスと彼の経済学体系の関係について簡単な解説を付け加えておきたいと思う。

ワルラスの経済学体系は、よく知られるように、純粋経済学、応用経済学、社会経済学の三つ

から構成されている。ワルラスは、プルードンを批判した最初の経済学上の著作『経済学と正義』 (1860) において既に、経済学を自然法則に支配される「交換価値、交換、生産」の理論(後の 純粋経済学と応用経済学)と道徳法則に支配される「所有、分配」の理論(後の社会経済学)に はっきりと分割しており、この時点で、前者への数学の適用を確信し、数理経済学の設立を固く 決意することになる。

このような経済学の分割と数学導入の思想的な動機となっているのは、父オーギュストの意志を継いで、労働者の恒久的貧困の問題を解決するにあたって、プルードンを初めとする同時代の社会主義者たちの主張を「経験的社会主義」として批判し、当時の社会主義を「科学的」なものに刷新したいという強い情熱である。そのような目標を達成するためには、生産力の問題のみに取り組み分配の問題を無視し続けて来た、J. B. セイの流れをくむ当時の正統派経済学を批判すると同時に、その貴重な経済分析手段を継承し、当時の社会主義にそれを接収させることが絶対に必要であるとワルラスは考えたのである。そして彼がここで「経済学」から受け継いだ最大のものは、「自由競争」という概念である。

そこでワルラスが、当時の社会主義が問題としていた所有、分配の問題の解決案として提示するのは、「条件の平等、(結果としての)地位の不平等」、具体的には、土地国有化と労賃免税のもとでの自由競争である。そして、このような主張の正しさを根拠づけるために、資本蓄積と人口増加に伴う地代と地価上昇および自由競争による効用の最大化を数学的に証明することを決意し、それによって自らの社会主義こそが「科学的」であることを示そうとするのである。

ワルラスが実際に数理経済学に着手するのは、このような決心の後10年を待たねばならない。その間に彼は人民アソシアシオン(協同組合)運動に身を投じることになり、労働者の境遇改善に奔走する。この時、彼が目指したものは、個々の労働者が貯蓄によって資本を所有することを促進すること、言い換えれば資本家と労働者の役割を同時に担う人間を育成しつつ資本蓄積を達成するというものであり、それと同時に自由競争による価格と賃金決定の原則を尊重するというものであった。実際には1868年にこの運動は挫折するが、このようなワルラスのアソシアシオン構想が彼の経済学体系とどのような関係にあるのかは、今後の解明を要する問題であろう。

そして1870年、ワルラスはローザンヌ大学に赴任し、それ以降は数理経済学の設立に没頭する。その後の彼の純粋経済学の成立過程に関しては、国内外共に豊富な研究の蓄積があるのでここでは触れないが、彼はまさにこの時ローザンヌで完成した『純粋経済学要論』(第四版は1900年)によって評価され、そこで展開された一般均衡理論によって経済学史上に名をとどめることになったのである。

しかし、ワルラス自身にとっては、彼の経済学は、純粋経済学が最も根幹の位置を占めている ものの、それを基礎とする応用経済学ならびに社会経済学が存在して初めて意味をなすものであ った。

まず社会経済学とは、彼の社会改革プログラムの柱となる土地国有化と税制撤廃の問題を取り

扱うものであるが、ここで展開される彼の主張の正しさに数学的な根拠を与えるべきものが純粋 経済学である。自然科学である「交換価値の理論」こそが道徳科学である「所有、分配」の理論 の基礎になるべきであるというワルラスのこのような信念は、彼がかつて最初の経済学上の著作 でプルードンを批判した時から生涯変わることはなかった。両者のこのような関係は、ワルラス が自らの「社会主義」を他の「経験的社会主義」と区別して「科学的社会主義」と呼ぶ裏付けと なっているのであり、彼の数理経済学(純粋経済学)の完成と普及への尋常ならぬ熱意は基本的 にはこの点に発していると考えられる。

また,貨幣,独占,労働市場などの問題を扱う応用経済学は,純粋経済学で指し示された理想的かつ仮想的な自由競争の制度を実際の社会で組織する方法を研究するものであり,「自由競争」という言葉を単なる「自由放任」という意味で使っていた従来の自由主義経済学とワルラス経済学を別つ決定的な点として彼は考えていたのである。

残念ながら、ワルラスは健康上の理由で、社会経済学と応用経済学に関しては、『純粋経済学要論』のような体系的な書物を残すことは出来なかった。しかしこれら二つの経済学も含めたワルラス経済学の全体像を、その非整合性も含めて包括的に理解しようとすることは、ワルラスの純粋経済学そのものを深く理解し、一般均衡理論の真の意義とその限界を知るためにも重要であると思われる。

ワルラスの純粋経済学は、彼の「科学的社会主義」の精神、すなわち、現状肯定的な自由主義 経済学を批判すると同時にそれを接収し乗り越えることによって、当時の社会主義に確固とした 経済分析手段を提供し、全く新しい社会科学を構築しようとしたワルラスの思想的な格闘から生 まれて来たものなのである。

以上のような点も含めて、本稿がこれまで余り知られていない人間ワルラスの一側面に近付く ための一つの手助けとなれば幸いである。

最後に、一橋大学経済研究所の津田内匠先生には訳文について懇切丁寧な助言をいただいた。 また同研究所の高須賀義博先生、西澤保先生をはじめとする方々にも貴重な助言をいただいた。 この場を借りて感謝の気持ちを表したいと思う。

注

1) 『レオン・ワルラスの生涯と著作(The life and writings of Léon Walras)』というタイトルがつけられる予定であったこの未完の「伝記」の第1章に当たる部分は,D. A. ウォーカーによって発表されている。Cf. William Jaffé, "The antecedents and early life of Léon Walras", Edited by Donald A. Walker, *History of Political Economy*, vol.16, no.1, Spring, 1984. この中で,ジャッフェは,ワルラス父子の社会主義思想における継承関係に焦点を当てている。

一方,ジャッフェが簡単にワルラスの生涯を紹介している資料としては,次のものがある。William Jaffé, "Léon Walras", *International Encyclopedia of Social Sciences*, edited by David Sills, vol.

- 16,1968. (安井琢磨,福岡正夫 編訳『ジャッフェ ワルラス経済学の誕生』日本経済新聞社 1977 年所収)
 - 2) この「自伝ノート」を取り巻く詳しい事情とその構成については、「自伝ノート」文頭の編者注 (1)を参照のこと。

なおこの「自伝ノート」を引用あるいは参考にした、日本におけるワルラスの評伝には、早川三代治『レオン・ワルラアス純粋経済学入門』(日本評論社 1931年)の「附録一、レオン・ワルラアスの生涯」、安井琢磨「ワルラス」(1937年)(『安井琢磨著作集』第1巻、創文社 1970年所収)、そして柏崎利之輔『ワルラス(経済学者と現代⑤)』(日本経済新聞社 1977年)の「II. ワルラスの生涯と業績』などがある。ただし最初の二つは、この編者注(1)でも言及されているイタリア語版の「自伝」をもとにしている。

- 3) 「自伝ノート | 第IV部訳注10) を参照のこと。
- 4) 「自伝ノート | 第IV部訳注9) を参照のこと。
- 5) 人民アソシアシオン時代のワルラスに関する研究は、これまで資料の面での制約が大きかったが、 「ワルラス全集」の第6巻(*Auguste et Léon Walras, Œuvres économiques complètes*, t.VI, Les associations populaires coopératives, Paris, 1990)の刊行によって、より容易なものとなるであるう。

「凡例】

- 一 「自伝ノート」の文頭と文末にある(1)は、編者ウィリアム・ジャッフェの注である。 訳注は)で示し、「自伝ノート」の訳注は各部ごとに、「リュショネと科学的社会主義」の訳注は 文末に一括してつけた。
- 二 本文中の「]は訳者による補足である。
- 三 原文中のイタリックは書名,団体名,会議名以外は傍点で示した。
- 四 原文中の大文字体は《 》で示した。

1. 自伝ノート

(1) 「ジャッフェの注〕

この自伝ノートの原文は、レオン・ワルラスの娘であるアリーヌ・ワルラス(Aline Walras)から1930年代に手渡された、彼女自身の手による草稿の写しを、コロンビア大学の故へンリー・ラドウェル・ムーア(Henry Ludwell Moore)教授の資料の中に保存されている、彼女自身の手によるもう一部の草稿の写しと対照することによって完成した。後者の草稿は第Ⅳ部(1904-1909)が欠けたまま終わっているが、「自伝ノート」を最初に書くことになった事情についての、レオン・ワルラス自身による説明の入った注が含まれている。「私は1893年にあるアメリカの雑誌の要請で、このノートの第 I 部と第 II 部の第一版を作成したが、ほとんど利用されなかった。("Personal Note"、Annals of the American Academy of Political and Social Science, January、1894、vol.4、No.5、pp.165-168(657-660)を参照せよ)当時それは三人称で書かれていた。次に私はそれを一人称に直し、追加をした。そして最後に、第 II 部の最後の段落を手直しし、第 III 部のパラグラフを付け加えた。1904年のことである。」 最後の第 IV 部は明らかにワルラスの死ぬ直前に書かれており、書簡では一切触れられていないが、G.H.ブスケ(Bousquet)教授が「経済・社会史雑誌」(Revue d'histoire économique et sociale、1951、vol.29、No.2、pp.146-155)で発表した「レオン・ワルラスおよびアリーヌ・ワルラスから、アルベール・オプティ(Albert Aupetit)への手紙」に(第 IV 部の第一及び第六パラグラフから成る)断片が見られる。

頻繁に引用されるイタリア語版「レオーネ・ワルラス自伝(Leone Walras-Autobiografia)」 は、マフェオ・パンタレオーニ(Maffeo Pantaleoni)が『ジョルナーレ・デリ・エコノミスティ』 (Giornale degli economisti, 1908, Series 2, vol.37, no.6, pp.603-610) に発表したものだが, 1893年に組み立てられたオリジナルの「ノート」の翻訳であることに間違いはない。イタリア語 版は,1834-1870年と,1870-1892年に関する最初の二部しか含まれていない。それは三人称で 書かれ,後の草稿に見られるような詳しい追加部分が欠けている。パンタレオーニが「自伝」に 「1900年執筆」と書き添えたのは誤りであろう。署名入りの序文 (*op.cit.*, p.603) でパンタレオー ニは、自分がワルラスに草稿を頼んだのは1900年だと主張しているが、ワルラス自身の回想によ れば、これも書いた日付から判断すればあまり正確でないようだが、彼が1895-96年に書いたと する草稿をパンタレオーニに渡したのは,1898年3月3日である。1904年,ヘンリー・ラドウェ ル・ムーアの勧めでワルラスは自伝を最新のものに書き加え、自分の死後まで発表は差し控えて ほしいとの指示つきで、ムーアに送った。ムーアはワルラスの死後数十年を生きたが、この自伝 を一度も発表しなかった。それはおそらく,アリーヌ・ワルラスが1910年1月5日のレオン・ワ ルラスの死直後に、ムーア夫人宛の手紙の中で次のように懇願していたことを考慮したからであ ろう。「私はあの方達(H. L. ムーアとアーヴィング・フィッシャー)に,父の書いた伝記を発表 しないでほしいのです。理由は、第Ⅲ部に書かれているジイド氏とオプティ氏の事です。私はジ イド氏を少しでも傷つけたくありません。ジイド氏は、オプティ氏が教授資格試験で失敗したために二人の仲がよそよそしいものになっていたにもかかわらず、父に対してはいつも非常に誠実で暖かい人でした。父の経済学者生活50周年記念に、フランスの教授達や経済学者達のサインが入った美しい衣装を発案し、「ルヴュー・デコノミー・ポリティーク(Revue d' Economie Politique)」に追悼記事を書いてくれたのは、ほかならぬジイド氏なのです…」(1910年2月14日付の手紙。コロンビア大学H. L. ムーア史料館所蔵。)

第 I 部。1834-1870

私は、1834年12月16日アントワーヌ=オーギュスト・ワルラス(Antoine-Auguste Walras)(モンペリエ出身)とルイーズ・アリーヌ・ドゥ・サント・ブーヴ(Louise Aline de Sainte Beuve)(エヴルー出身)の子として、フランスのウール県エヴルーで生まれた。私が人生の最初の時期を過ごしたのは、パリ(1836-39),リール(1839-40)そしてカーン(1840-50)である。

私は1844年にカーンのコレージュに、また1850年にはドゥエのリセに入学し、1851年に文科の大学入学資格を獲得した。私は一年間、基礎数学の課程を、さらに一年間、特別数学の課程を修めて、1853年に理科の大学入学資格を獲得した。同年、私は理工科学校の入学試験に志願したが、「模擬試験」と呼ばれる受験準備のための演習に出るのをそれまで怠っていたので、受験資格はないと言い渡された。私は特別数学の課程をやり直すことになったが、既に出席した授業にまた出ることはやめて、理工科学校のデュアメル(Duhamel)教授の解析学と力学の講義ノートを手に入れ、それを勉強し、むしろ解析幾何学、微積分学、解析力学の源泉を、デカルト、ニュートン、ラグランジュの著作に求めた。私はまたこの時期にクルノーの『富の理論の数学的原理に関する研究』を初めて読んだ。このような準備はしたのだが、私は最初のときと同じように、二回目もまた受験を拒否された。

そこで私はパリの鉱山学校を志願し、1854年そこの通学生となることを許可された。しかし私は、技術者にかかわる細かい専門知識に対して全く興味が沸かず、少しずつ学校の授業を怠けるようになり、哲学、歴史、文芸批評、経済学、社会科学についての自分の知識を完全なものにするために、熱意をもって文芸研究に戻った。

私は作家と評論家の道を歩むことを決心したが、父の希望に従って、とりわけ政治社会経済学りに没頭した。この点に関して、私の生涯のうちで最も決定的な時が、1858年の夏のある日の夕方に訪れた。ポー川の谷間を散歩していた時、父は私に、19世紀には成し遂げるべき大きな仕事がまだ二つあると力強く断言した。それは歴史学の創造を成し遂げ、社会科学の創造を始めることであった。第一の点に関しては、ルナン²⁾がどれほど父を満足させるはずであるか、当時の父は予想していなかった。第二の点は、父を生涯没頭させていたものであり、こちらのほうが明らかに父の心を動かしていた。父はこの仕事が私に引き継がれるものであることを確信をもって主張し

— 7 —

ていた。そしてこのとき、レ・ロゾゥ(Les Roseaux)と呼んでいた別荘の入口の前で、私は父に、文学と芸術批評を放棄して父の仕事を引き継ぐことに完全に身を捧げると約束したのである。父の若干の指示に助けられ、私は1859年にパリで、私の最初の経済学上の著作3)を完成した。それはプルードンの学説に対する私の反駁であった。一部はまさにこれを書いている時に、また一部はこれを出版した後に、私は、人口と富が増大するにつれて地代と地価が上昇する事実と、農業、工業および商業生産に関して自由競争の制度を採用することによって最大の効用が得られるという事実を、数学的に証明すべき二つの事実として認識し、数学の形式で創設すべき純粋および応用経済学を直感したのである。

1860年7月,私はローザンヌで開かれた国際租税会議に出席した。この会議での報告と私がそこで主張した意見についての解説が,私の二番目の著作"の題材となっている。私はさらに,ヴォー州で開かれた租税問題に関するコンクールに論文を提出した。私はその論文で,土地と地代を国家に帰属させるという理論をはっきりと示した。私は最初の二つの著作では,そのことを不完全な形でしか述べていなかったからである。この論文が審査員会によって与えられた評価は四等賞でしかなかった。このことは,『富か貧困か』の著者であるA.C.シェルビュリエ⁵⁾の審査報告に基づいてこうなったのである。彼は20年前には土地国有化の支持者であったが,それ以降は,転向して土地国有化に反対する方が時宣にかなっていると考えるようになっていたのである。私がその会議で演じた役割はもっと控え目なものであったが,大衆,新聞およびヴォー州当局からは逆に好意的に評価された。というのは会議の後,文部評議会から県あてに,私がローザンヌのアカデミーで経済学を教えることを担当するようにという招請状が送られて来たからである。この申し出は,10年後にようやく実現することになるはずであった。

1859年、私は『ジュルナル・デ・ゼコノミスト(Journal des Economistes)』誌に入り、次に 1860年、ヴィクトル・ボネ氏の推薦のお陰で『ラ・プレス(La Presse)』誌に入った。しかし科学の状況は当時、経済学に関する限り最も悲惨であった。皆が目指していた地位は全フランスで、三つの教授職と八つのアカデミー会員職であったが、それらは正統派に独占されていた。正統派とはつまり、しばしば矛盾し常に悪質な様々な議論によって、現在の社会体制をこの世の終わりまで人類を満足させることの出来る最上なるもの(nec plus ultra)のように我々に示す学派のことである。正教授達は学問の人というよりもはるかに政治家で、いくつもの職を兼任しあっており、現職による指名ということを口実にして、父から息子に、義理の父から娘婿に、叔父から甥あるいは義理の甥に、それらの職を自分達で廻しあっていた。新聞、雑誌のうち最も重要なものは、この派閥の支配下にあった。しかもすべてが政府の言いなりで、政府は政令によってそれらを発行停止にすることができ、新しく発刊するにも認可が必要だった。本やパンフレットに関しては、刷り上がり10頁以下のすべての印刷物に対して、1頁あたり5サンチームの印紙税、すなわち1000部ごとに50フラン以上450フラン以下の罰金が課されていた。やがて私の記事は『ジュルナル・デ・ゼコノミスト』に掲載を拒否されるようになり、社主の勧めに従うことに同意せず、

私は『ラ・プレス』もやめたが、経済学雑誌を創刊することも許可されなかったので、私はこの世界を離れて、1862年、北仏鉄道の秘書課の職につかなければならなくなった。それは、ヴィクトル・ボネ氏の義理の兄弟にあたる訴訟課長のデュ・ロンスレ(du Ronceray)氏の世話によるものであった。

何という時代であろう!私は、科学哲学について幾つかの講演をする許可を得るために請願書を書いたが、パリ大学区の副区長までもが、そういうものを文部省にとりつぐなんてとんでもないと私に説明する有り様だ。科学哲学に形而上学はつきものだ、形而上学は宗教に触れる、などなど…。大司教が相手ならともかく、それをするのが仕事のはずの大学の高官ともあろうものが!私は立ち上がり、ソルボンヌの中庭に面した二つの窓の間のコンソール"の上の帽子に手を伸ばした。私は軽く会釈をして出て行った。

この光景は、内務省の局長の部屋でもう一度繰り返される。私は、政治社会経済学の週刊雑誌を発刊するのに必要な認可を願い出た。私に関して、細かい調査がなされたが、結果は申し分ない。父は政府の立派な役人であり、バス・ピレネーの大学区の視学官である。私自身も、政治的争いには一度も巻き込まれたことのないまともな若者である。私に認可が降りないのは、誰に対しても認めないことが決められているからである。今度こそ、私は部屋を出る時にこう言わずにはいられなかった。——お役所がこんな偏見をもっていることをちゃんと知らせておけば、我々にこんなに多くの時間を無駄にさせたり、無用で不愉快な手続きを踏ませなくてもすむでしょうに、——と。

1865年の初め、私は協同組合に関する三度の講演®を行い、これらの計画を経済的に援助するた めの方策を話しあうために、ポール・アンドラル(Paul Andral)氏のところで開かれた会合に参 加し、人民アソシアシオン割引金庫の経営のために派遣される理事の一人に選ばれた。我々の目 標は、協同組合員に自分が常に二重の役割――例えば、消費の組合においては買い手の役割と商 人の役割と、生産の組合においては労働者の役割と実業家の役割と――を果たすものと見なすこ とによって、組合の中ですべての企業の経済原理を維持するように導くこと、その結果、商品の 価格と労働の賃金をそれとして受け入れ,一般市場で決まるようにしておくこと,そして販売価 格と原価の差については、それを資本の割合に応じて分配することであった。資本のみが損失を 引き受けることが出来るという理由から利益は資本にのみ属するからである。私は1866年3月に 行った公開講演"の中で、この割引金庫の活動について説明し、1866-67年と67-68年の2年間に 公刊された『労働 (Le Travail),協同組合運動雑誌』という雑誌の発刊と編集に協力し,さらに 1867年から68年の冬の間に行った公開講演10の中で、金庫の顧客と『労働』の読者を前に、社会道 徳の原理を説明した。割引金庫の経営者という資格で,私は消費,生産および信用協同組合への 協力を惜しまなかった。不幸なことに,これらのアソシアシオンは,何よりも消費物の安価と労 働の高賃金とを追求するばかりで,自己資本のことは余り念頭になく,借り入れ資本については 尚更であった。何ひとつ成功せず,借金を返済するにも何もなかった。そして1868年の末,割引

— 9 —

金庫は自己資本を失った後、理事達個人とそのほかにその試みを支援していたフランス中央銀行にかなりの損失を与えて、解散しなければならなかった。私はオランデール (Hollander) 氏という銀行家のオフィスにひきとられ幸運だと思った。彼は、割引金庫の監督委員の一人だったのである。私は彼のオフィスへ1869年の初めに入り、19カ月間そこにいた。

(第 | 部 訳注)

- 1) ワルラスは、従来の経済学 (すなわち政治経済学 l'économie politique と呼ばれていたもの) を、正義という道徳的観点が全く抜け落ちたものとして批判し、自らの経済学をそれと区別するために、政治社会経済学 (l'économie politique et sociale) と呼ぶ。それは、純粋経済学 (l'économie politique pure)、応用経済学 (l'économie politique appliquée) そして社会経済学 (l'économie sociale) の 3 つから構成される。
- 2) Ernest Renan (1823-92) フランスの歴史家, ヘブライ古典学, 言語学および批評学者。非正統派的見解により, コレージュ・ド・フランスの教職の座を一年で追われたが, 同時代の知識人に大きな影響を及ぼした。作品の中のロマン主義, 唯心論, 科学的唯物論の結合が彼の魅力であった。
- 3) 『経済学と正義——P.-J.プルードン氏の学説に関する批判的検討と反論』(L'économie politique et la justice, examen critique et réfutation de la doctrine de M. P. -J. Proudhon, Paris, 1860)
- 4) 『租税の批判的理論――ローザンヌ会議の回想に続いて』 (Théorie critique de l'impôt, précédée de Souvenirs du Congrès de Lausanne, Paris, 1861)
- 5) 正しくは、Antoine Élysée Cherbuliez(1797-1869)である。彼はジュネーブ大学、ローザンヌ大学などの教授を歴任したスイスの著名な経済学者で、このコンクールで審査員を務めていた。 『富か貧困か』(*Riche ou pauvre*、1840)では、土地私有の廃止と土地国有化によって政府が十分な耕作資本をもつ者に土地を賃貸すれば、農業が飛躍的に発展するということが述べられていた。
- 6) Victor Bonnet (1814-85) ジャーナリスト。金融, 銀行業の専門家。
- 7) console 壁に取り付けられた18世紀の装飾用テーブル。
- 8) 『消費, 生産, 信用の人民アソシアシオン――1865年1月と2月にパリで行われた公開講演』(Les associations populaires de consommation, de production et de crédit, Leçons publiques faites à Paris en janvier et février, 1865, Paris, 1865)
- 9) 『人民アソシアシオン割引金庫の活動——1866年3月にパリで行われた公開講演』(Les opérations de la Caisse d'Escompte des Associations populaires, Leçon publique faite en mars 1866 à Paris, Paris, 1866)
- 10) 『社会理想の探究――1867-68年にパリで行われた公開講演』(Recherche de l'idéal social, Leçons publiques faites à Paris (1867-68), Paris, 1868) これは後に『社会経済学研究』(1896) にも収められた。(第III部参照のこと。)

第II部、1870-1892

ヴォー州の政治家達は、1869年の法律でローザンヌのアカデミーを再編して、法学部に経済学 の講座を設けたいと考えていたが、彼らが1860年の租税会議で知ったエコノミストの事を思い出 し、私に採用審査を受けて欲しいという意向を知らせてきたのはまさにこの時であった。私は承 諾し、7月いっぱいで辞職願いを提出し、1870年8月7日日曜日の朝、住んでいたサン=マンデ (Saint-Mandé)を離れ、パリにはとどまらずそのまま通り抜けてノルマンディに向かった。非常 の事態"が生じていたので、私はその時既に私の生涯の希望としていた経済学の教育の準備をしつ つそこにいることになり、まずは、原則として40才以下の既婚男性を召集するという国防省の動 員令の発令下にひきとめられたのである。審査が開始され、審査員の名前が挙げられていた。私 は既に履歴を明らかにし,著作を提出してあった。審査員会は七人で構成されていたが,そのう ちの三人が地元の名士で,四人が経済学の教授だった。前者は私に対して好意的だったが,四人 の教授のうち三人ははっきりと反対だった。四人目の教授,ジュネーヴのダメト教授²⁾は,他の教 授達同様に私の考え方に賛成ではないが、このような見解は明らかに率直で真摯なものであり、 それが教授されることが科学の利益に適うものと考えるので、私に一票を投じると言明した。任 命がなされた。同時に動員令が撤回されていた。私は、コレージュでの旧友であるカーンの二人 の市会議員と一緒にカルヴァドスの県庁に出頭し、もし動員令が再び発令されればフランスに戻 ることを友人の保証の下に約束して、旅券を申請した。私はカーンを12月7日水曜日の朝出発し、 ル・マン、アンジェ、ニオール、ポワチエ、ムーラン、リヨンを経て、ローザンヌに赴いた。私 が教壇に立ったのは12月16日だった。私は36才になっていた。

数理経済学を創設したいという考えは、ヴォー州の州評議会に宛てた求職願いの中でも表明しておいたのだが、1860年以来一度も私の脳裏を去ったことがなかった。私は、私の講義を暫定的に通常の形式で準備してしまうとすぐに、その仕事にとりかかった。この方面で私が知っていた唯一の真剣な試みはクルノーのものだった。私は既に、需要量を価格の関数とするクルノーの需要曲線が多数の商品の交換の場合には近似的で、二商品の交換の場合にしか正確でないことを知っていた。そこで、私は問題を後者の場合に限って、まず第一に、各商品の需要曲線から他商品の供給曲線を演繹し、需要・供給曲線の交点から生じる均衡市場価格を演繹した。そして次に、需要曲線そのものを、二商品の所有量と二商品に対する効用つまり欲望曲線から演繹した。この欲望曲線は、満足させられた最後の欲望の強度つまり稀小性を消費量の関数とするものであり、このように価格の本源的要素を形作り、かつすべての数理経済学の礎石をなすものであったのである。この理論は以上のような限定内にとどめて、1873年8月、パリの道徳政治アカデミーで報告された。そしてこの報告をきっかけとして、私は、イギリスでジェヴォンズが私より2年前に、私の二つの問題のうち二番目の方を解決していたことを知った。彼は効用曲線を設定し、稀小性一彼はそれを効用の最終度と呼ぶ——の価格に対する比率が等しくなるということによって最

大満足の条件を作り、それによってこの問題を解決していたのである。私の報告はすぐに外国で、 その発見に関して生々しい反響を呼んだ。

二商品の交換の理論から多数の商品の交換の理論へ、交換の理論から生産、資本形成、貨幣の理論へと移っていった私は、しだいに経済均衡の理論全体を作り上げて行った。まずは、「交換の数学的理論の原理」(1873)、「交換の方程式」(1875)、「生産の方程式」「資本形成の方程式」(1876)という四つの論文においてそれを行った。間もなくそれらは、それぞれ『社会的富の数学的理論(Teoria matematica della richezza sociale)』(1878)と『経済的財の価格決定の数学的理論(Mathematische Theorie der Preisbestimmung der wirthschaftlicher Güter)』(1881)という題名でイタリア語とドイツ語に翻訳された。次に私は初版が1874-77年に、第二版が1899年に刊行された『純粋経済学要論』において、それを行った。『社会的富の数学的理論』(1883)は七つの論文で構成されている。最初の五つの論文、すなわち上記の四つの論文に、「複本位制の数学的理論」(1876-81年及び82年に『ジュルナル・デ・ゼコノミスト』に掲載)に関する五番目の論文を加えたものは、純粋経済学の労作であるが、残りの二つは「銀行券の数学的理論」(1879)と「地価および国家による土地買い戻しの理論」(1880)にあてられ、そこではすでに数学的方法が応用経済学と社会経済学に適用されている。

私は、J.S. ミルと同様に、社会的富の科学のうち、個人と国家の間でのその分配を扱い、正義の原理に訴える部分を社会経済学と呼ぶのであって、ル・プレイ³学派やわが国の法学部のように、雇用者の慈善的制度や協同組合や保険に関する研究をそう呼ぶのではない。それらは応用経済学の非常に興味深い対象ではあるが、これらは総て、たかだか隣人愛や友愛や自由なアソシアシオンの原理、つまり社会的効用の原理に依存するものであって、これらを社会経済学における所有と税の問題に置き換えることは、保守的な立場からなされようと、急進的な立場からなされようと、目的はただひとつ、すなわちブルジョアや自作農が彼らの収入や月給や金利収入を出来るだけ苦労せずに悠々と享受できるように、プロレタリア⁴の境遇を、より耐えやすいものにするという目的をもっているだけである。

貨幣の応用理論は、二つの論文⁵「貨幣価値の変動規制方法について」と「銀貨鋳造停止以降の価格変動に関する研究への貢献」と、1886年に公刊され、それまでの様々な研究の要約である『貨幣の理論』という特別な著作のテーマであった。私はここで、「銀を規制的補助貨とする金貨」⁶という私の体系を発展させた。私は実践の領域にまで踏み込んで、1887年、この方向に進むべき第一歩として、インドにおける貨幣の自由鋳造の停止を提案した。それは6年後の1893年そのように決定された。1891年と1892年に、私は『価格決定の幾何学的理論』を著したが、そこで、二次元解析幾何学の基礎的形態で、自由競争における価格成立に関する私の理論の総てを要約することに成功した。それによってどうにか基礎教育課程に新しい教科をいれることができた。

仕事のためというよりもいざこざのために私は定年を前に疲れはて,1892年教職を退いたが, そのすぐ後に,ローザンヌ大学の名誉教授に任命されるという喜びを得た。私は主にヴォー州自 然科学協会を通して、次々と論文を公表した。この協会は私の報告を聞いてそれらを数学部門の他の報告と一緒に出版してくれたのである。次に挙げる学会は自発的に私を迎えてくれた――ローマに本部がある「国際統計学研究所(Institut international de statistique)」は1886年に準会員として、1887年には正会員として、「リエージュ王立科学協会(Société royale des sciences de Liége)」は1887年に通信会員として、「アメリカ経済学会(American Economic Association)」は1892年に名誉会員として。このように、私の理論はスイス、イタリア、ベルギー、アメリカに広まり、好意的に受け入れられたのだが、フランスではそうではなかった。

1879年,友人のジュール・フェリイ"が文部大臣になったので,エロー県知事のカゼル博士®は私に,当時準備されていたいくつかの法学部での経済学の教育のために,尽力したいと申し出ればどうかと勧めてくれた。私は博士とは,彼が20年前に病院のインターンだった時からの知り合いだった。彼は,モンペリエの大学区長アルベール・デュモン(Albert Dumont)氏の賛同を得ていた。私は7月3日,大臣に手紙でそのことを申し出て,その手紙の写しをカゼル氏とデュモン氏にも送った。ヴァカンスでフランスに行ったとき,フェリイはパリにいなくて会えなかったが,8月14日には,少し前から文部省の高等教育部長になっていたデュモン氏と話をした。彼との話に続いて,私は彼に,26日シャルトルから,「国立高等研究院における政治社会経済学の教育組織に関する覚書」®を送った。それは,学部の教授を養成することを目指したものであった。この件は最初はうまく行きそうだったが,間もなくより差し迫った関心事の犠牲になった。現在のフランスに長期的な政策を期待すべきではない。フランスはその場凌ぎのことしかやっていないのである。

このような試みのほかにも、ローザンヌでの22年の在職期間中ずっと、私の努力の成果が祖国で知られ議論されるようになることを願ってやまなかった。私はかつて、「交換」「生産」「資本形成」の方程式が含まれている三つの論文を、道徳政治科学アカデミーで報告しようとしたがうまくいかなかった。それ以来、私は自分の考えをフランスに浸透させようと更に何度も試みたが、世襲の特権的知識人たちの途方もない影響力と隠された激しい敵意に、直面しなかったことはただの一度もなかった。彼らは科学の成熟を妨げる任務を負っているのである。

我国では法律は変わっても、慣習が変わることなどどんなに少ないことか!1884年、私は貨幣の応用理論の原理をつかんだので、「銀を規制的補助貨とする金貨制度について」¹⁰⁾の問題を、24年前から会員であるパリの経済学会(la Société d'économie politique)の通常の討議予定に登録した。1885年の復活祭に、私はヴァカンスを利用して私の問題に関する議論をしに行きたいと思い、その討議の日程を4月5日の会で希望した。しかしこの時、政治の科学への果てしない干渉が生じるのである。これこそが官職の制度の本質である。学会の会長は元大蔵大臣で、彼はその権限で1878-79年に銀貨補助貨幣を作り、自由鋳造を廃止したのだが、「フランス銀行の金保有高については勝手な議論はさせない」と言って、私が計画を断念するように意向を示すのであった。私は方向を変えて、私の体系を統計学会で報告するために、ある人をみつけた。あいにく経済学

会の会長は統計学会の会長でもあり、報告は酷評されるはめになった。そのうえ、[人民アソシアシオン]割引金庫の元会長で、なんでも会長を務めるレオン・セイ氏¹¹⁾がすべての雑誌を掌握していた。彼にそそのかされて、『ジュルナル・デ・ゼコノミスト』は私の記事を返して来るし、『科学雑誌(Revue scientifique)』は私の『貨幣の理論』の第一部と第二部をよろこんで掲載したくせに、その結論が含まれている第三部の掲載は断ってきたのである。この男は、確かに私が1874年以来、教授資格会員であったフランス生命保険数理士協会(Société des Actuaires français)の会員であった。そして彼こそは1880年に会長に就任すると私を追い出してしまった人物なのである。1890年に私が土木技師協会(Société des Ingénieurs civils)で報告した時にも、彼はそこにいた。この報告は、コンタマン(Contamin)氏とコベ(Caubet)氏の同意を得て準備したもので、とてもうまく行きそうだったのに、この男のお陰でただ冷たく迎えられ、何の反響も得られなかった。

1892年の終わりに、私はつくづく思った――私の人生は、祖国を間違えた人間の人生だ。文学的でかつ数学的、哲学的でかつ経済的という二重の教養を必要とする革新的な仕事を、専修学校と官製の科学の国で成し遂げたいと考えている人間の人生なのだ。もし、総合的な大学と自由な科学の国に生まれていれば、哲学の学部で私に必要な総ての学科が見つかっていただろうに。20~22才で博士号を取り、25~30才で教授になっていただろうに。そうであったなら、私は今頃、私がまだ概略さえ示すことが出来ていない政治社会経済学の体系を発表し終っているだろうに、――と。とはいえ私はさらに行程を果し、私の体系の概略を示さなければならなかったのである。

(第Ⅱ部 訳注)

- 1) 普仏戦争(1870-71) のこと。
- 2) Claude Marie Henri Dameth(1812-84) フランスの経済学者。リヨンで教えた後,ジュネーブ 大学の経済学と統計学の教授となる。著書には、『フーリエ主義の擁護』(1842)『正義と効用』(1859)、 「経済学と唯物論」(1862)、『社会主義運動と経済学』(1869)、『社会問題』(1872) などがある。
- 3) Pierre Guillaume Frédéric Le Play (1806-82) フランスの保守的な社会改革者。カトリック 的な道徳,義務,権威への服従などの原理に基づいて社会の経済的条件を改良することを提唱し, そのような社会改革へのアプローチの方法を自ら「社会経済学」と呼んだ。
- 4) ワルラスの言う「プロレタリア」とは、土地をもたない者のことで、労働者であるか資本家であるかは問われない。
- 5) これらの論文は『応用経済学研究』(1898) に収められた。
- 6) 10) Cf. "Monnaie d'or avec billion d'argent régulateur", Revue de Droit International et de Législation Comparée, 1er décembre, 1884. なおこの論文も『応用経済学研究』(1898) に収められている。
- 7) Jules Ferry (1832-93) 法律家。ジャーナリスト。1879-82年,文部大臣を務める。また1880-

81年、1883-85年の二度首相を努める。

- 8) Emile Honoré Cazelles (1831-1908) 医者。哲学者。1879年にエロー県知事となる。J. S. ミル、ハーバート・スペンサーなどの訳者でもある。
- 9) Cf. "De l'organisation de l'enseignement de l'économie politique et sociale à l'École Pratique des Hautes Études", 1879, Auguste et Léon Walras, Œuvres économiques complètes, t.VII, Paris, 1987.
- 11) Jean-Baptiste Léon Say (1826-96) J. B. セイ (1767-1830) の孫。経済学者。実業家。1872, 75, 89年には大蔵大臣を務める。彼はワルラスが北仏鉄道に入った1862年当時,その重役を務めていた。その後,レオン・セイは協同組合運動におけるワルラスの協力者となり,協同組合雑誌『労働』をワルラスと共同編集して公刊した。

第Ⅲ部、1892-1904

1894年の初め、つまり退職と休息の一年後、私は『社会経済学および応用経済学要論』をまとめられるような状態になかったが、その代わりに、それぞれがひとつのかなり完成したまとまりをなすような、これら二分野に関する二冊の『研究』なら書けると思った。そこで私は次のような手順でそれを達成したのである。

私は1896年に『社会経済学研究』を出版した。その中には、「社会理想の探究」(1868)を含む既に発表ずみの論文と、三つの未発表論文「調整あるいは統合の方法」、「所有の理論」、「財政問題」とが含まれている。これら三つの論文は、同僚のジョルジュ・ルナールいが当時編集をしていた『社会主義雑誌(Revue socialiste)』に1896年掲載されたものである。

そして私は1898年には「応用経済学研究」を出版した。これも同じく,以前の作品から構成されているが,その中には,「貨幣の理論」(1886)と七つの未発表論文「複本位制の危機」,「国家と鉄道」,「応用経済学と賃金の擁護」,「自由貿易の理論」,「信用の理論」,「ウイーンの郵便貯金と社会的コンタビリスム(comptabilisme)」,「経済社会原理の略説」が含まれている。後者七つの作品のうち,一番目のものは「社会主義雑誌」に、二番目のものは1899年に『公法・政治科学雑誌(Revue du Droit public et de la science politique)』に,そして後の四つは1897年と1898年に『ルヴュー・デコノミー・ポリティーク(Revue d'économie politique)』に掲載された。この雑誌は1887年に,フランスの諸大学の法学部に属する経済学の教授たちの機関紙として設立され,私は最初から外国人寄稿者の一人に加えられていた。私は「経済社会原理の略説」を,穏健なものであれ進歩的なものであれ,ともかくフランスの選集に掲載してもらおうとしたのだが駄目だった。しかし『ガゼット・ド・ローザンヌ(Gazette de Lausanne)』は私に関して常にリベラルで,その最後の最もすさまじいパラグラフを恐れることなく掲載した――「フランスの政治――自由な思想家の祈り」,1898年7月14日と18日の号。

1900年、私は『純粋経済学要論』の第四版を出した。それには利子率の決定に関するひとつの理論が含まれているが、この理論は、交換方程式と最大満足から初めて演繹されたものであり、12月には「純収入率の方程式に関するノート」という題で、フランス生命保険数理士協会の会報に掲載された。私は1893年にその通信会員に選ばれていたのである。そして貨幣価値の理論もまた、流通資本の価格理論と同時に、交換方程式と最大満足から初めて演繹されたものである。この理論は1899年に、ヴォー州自然科学協会で「流通の方程式」という題で報告していたものである。私はそれを機会に、この協会の名誉会員に選ばれた。この『純粋経済学要論』の第四版に『社会経済学研究』と『応用経済学研究』とを加えると、それで私の経済社会原理に関する十分な理解が得られると私は信じている。私は1902年にこれら三冊に最終的な校正を行い、私がいなくなった後で私なしに容易に出版出来るように、製版のため紙型をとった。

何よりも、これらの努力がある成果をもたらしたに違いないように思う。

1901年5月,クララン (Clarens) に身を落ち着けようとしていたとき、私は、アルベール・オプティ氏²⁾から手紙を受け取った。彼は、私の理論に対する賛同の手紙と共に、彼がパリの法学部に提出した経済学の博士論文を私に送って来たのだった。「貨幣の一般理論についての試論」と言う題の、その論文の第一章には経済均衡の数学的条件が完璧に要約されていた。私はついに、最初のフランス人の弟子を得たのである。

続く9月,私の理論の礎石をなしている効用の数学的表現が,前年,生命保険数理士協会で承認出来ないと宣告されていたので,私はアンリ・ポワンカレ氏³に質問状を出した。彼は,計測不可能な量も,あなたが守っている一定の条件の下では,完全に数学的思考の対象となりえますという返事をくれた。

同年、ついに、リヨン大学法学部教授であるエミール・ブヴィエ(Emile Bouvier)氏の「経済学における数学的方法」という題の論文がまず一部、『ルヴュー・デコノミー・ポリティーク』に掲載され、次にその全体が単行本として公刊された。その結論は、この方法こそが科学を「現在の因習から脱出させる」ことが出来るのであり、「関心を持ってその努力を見守り、さらにそれを援助する」べきだというものであった。これこそ、エコノミストの間のまことに十分な同意であった。

これらの称賛に励まされて、私は1902年の1月に、(1)数理経済学と数理統計学の専門分野を、研修会員と教授資格会員の資格取得のために要求される知識の中に入れること、(2)もし必要ならば、これらの知識の修得を目的とした講義あるいは講演の準備をすることを、正式に生命保険数理士協会に提案した。さらにギエイス(Guieysse)会長を介して、私は協会の会員達に、私の『純粋経済学要論』は出版社に請求すれば入手可能である事を知らせた。これらの会員のうち20人ほどがこの申し出を利用した。7月には、私はオプティ氏が、生命保険数理士協会の研修会員として受け入れられたことを知った。

まさにこのような状況の下,1903年6月2日の夜9時,私は彼から手紙を受け取った。彼は,

ジイド氏⁴の要請で次の冬に高等社会研究学院(l'Ecole des Hautes Etudes sociales)で,経済学における数学的方法の原理と応用に関する講義をすることを引き受けたばかりであることを私に知らせ,かつローザンヌの私の講義では,このようなテーマに関して正確な概念を十分に準備していない聴講者にも理解できるようにするという問題を,私がどのように解決していたのかとたずねて来たのである。このように,私の最初のフランス人の弟子は,パリで数理経済学の最初の講義をしようとしていた。その夜,私は開いた窓の前に座って,月光が湖とダン・デュ・ミディ⁵の影に頂を覆われた山々とを照らすのを見ながら,ついに私の総ての理論がフランスに向けて発射されるのを見る思いがした。私はオプティ氏に,私は至るところで解析学的証明の代わりに幾何学的証明を用いて所期の目的を達成したのだと答え,いずれ,私の授業のテキストをお渡ししようと書いておいた。

ジイド氏が初めてスイスまで私に会いに来たのは1881年だったが、それからは度々訪ねて来た。彼は私の『ルヴュー・デコノミー・ポリティーク』誌上での論文を総て受け入れてくれ、私の総ての出版物を彼自ら、誌上で紹介してくれた。彼はただ単にドイツ歴史主義の言いなりになるのではなく、フランスの大学の経済学を官製の学派の専制から解放することを望んでいたので、私の方法と学説を評価してくれていたのだと思う。1900年の7月と8月にパリで開催された「社会科学教育国際会議」の報告書の中で、彼は次のような文を書いている。「――もうひとつの大きな欠落は、経済学における,更にいえば特に数理経済学における方法に関する教育の不在である。考えてみれば全く恥ずかしいことだが、数理経済学に関しては卓越した地位を占め、クルノーとともに数理経済学を創始した国、このフランスで、この分野に関する教育が全くない。それを教えられる教師もおそらく一人もいないであろう。奇妙な皮肉ではあるが、この教育を20年間ローザンヌで輝かしく担当したのが、一人のフランス人であった。だが彼は全世界でスイス人として知られているのである!ワルラス氏である。」それにジイド氏は経済学の教授資格試験の審査員であった。オプティ氏はすでに1901年にそれを受けていたが、彼が次回もう一度それを受けることを私は知っていた。

こういう状況だったので私は『純粋経済学要論』の最初の二つの版に基づいて作成されたローザンヌでの講義テキストを手直しし、第三版と第四版に基づいてそれを完成させることを思い付いたのだった。それは、数学的知識に関しては、幾何学、代数学、二次元の解析幾何学の初歩的概念しか必要とせず、法学部のみならず、いつの日かは、リセや工業および商業の職業専門学校といったすべての中等教育機関においても「純粋経済学基礎講義」が行なえるようにするためである。ますますひどくなるつらい脳神経症にもかかわらず、私はその仕事に取り掛かり、この作業を1903年の6、7、8、9、10月の5カ月間行った。60回分の各々殆どが、私には夜の発作に相当した。不運なことに、この仕事を終えないうちに、私は8月、ジイド氏から手紙を受け取った。その手紙で私はたまたま、教授資格試験が1903年に行われる予定ということ、そしてオプティ氏がそれを受けるということを知ったのだが、それにはこう付け加えられていた――「私自身

はこの任務を辞退して、彼のことは審査員に熱心に推薦しておきます。」そのときから失敗は目に見えていた。この教授資格試験の五人の審査員のうち、一人が学士院の代表で、四人が教授であったが、教授たちのうち、12ないし15の地方及びアルジェリアの法学部のうちのどれかに属するのはたった一人で、残りの三人の教授は歴史主義と国民経済学とメリーヌの主義にまったく忠実な、パリの法学部のみに属していて、それだけで過半数を占めていた。ジイド氏の代理と同僚二人は、私の弟子の試験答案が素晴らしい出来であったにもかかわらず、彼に空席の三つの教授資格職のうちのどれも与えることを拒否したのである。ジイド氏はこの審査員でなかったことを大いに後悔していると私に手紙を書いて来た。そしてオプティ氏は一度も私の講義ノートを要求して来なかったのである。

だがもう,このような「フランスの科学のこと」は放っておこう。そして人間の進歩の難しさ と遅さについて,より高度で無私な見方が出来るようになるように自分を高めよう。

1903年 6 月23日の午後, 私が書斎の入口まで見送ったのは, ニューヨークのコロンビア大学の若きヘンリー・L・ムーア教授"であった。彼は, アメリカで遭遇している障害を私に説明した後, こう言った。「ワルラスさん, いいですか, あなたが経済学において成し遂げようとしているような科学革命は, 50年かかるのです。」

----「全くその通りだ」と私は答えた。

そして私達は書棚のそばにいたので、私は棚からラプラス®の『天文学史概要』®を取り出し、栞のしてある139頁を開け、次のような一節を彼に読んだ。

「ニュートンの万有引力の発見からおよそ50年が過ぎたが、注目すべきものは何も付け加えられていない。この偉大な真理が一般に理解されるのにこれほどの時間が必要だったのである、等々。」その後、我々は手を取り合って励まし合った。なるほど、私が社会的富の数学的理論を要約した四つの論文を公刊してから30年しか経っていないのだから、この理論はあと20年すれば「一般に理解される」ようになるのだと考えることも出来るのである。

(第Ⅲ部 訳注)

- 1) George Renard (1847-1930) 高等師範の学生のときにパリ・コミューン (1871) に参加,活躍。その後スイスに亡命し、1887年にローザンヌ大学のフランス文学の教授になる。1907年にはコレージュ・ド・フランスの労働史の教職に就いた。ワルラスとは1866年に知り合い、その友情は生涯変わることが無かった。
- 2) Albert Aupetit (1876-1943) フランスの経済学者。1921年には、政治科学学校(Ecole des sciences politiques) の教授に任命された。
- 3) Henri Poincaré (1856-1912) 著名な数学者。パリ大学理学部教授。学術的な論文のほかに、 『科学と仮説』(1902)、『科学の価値』(1906)、『科学と方法』(1908) などの著作がある。
- 4) Charles Gide (1847-1932) 経済学者。協同組合運動の理論家及び擁護者。平和主義者。1874

年から1919年までボルドー大学,モンペリエ大学,パリ大学の法学部の経済学の教授を歴任。1921-30年コレージュ・ド・フランスの教授となる。

- 5) Dent du Midi スイス・フランス国境、サヴォア・アルプスの最高峰。
- 6) Jules Méline (1838-1925) 1896-98年フランスの首相を務めた。保護主義者として有名。
- 7) Henry Ludwell Moore (1869-1958) アメリカの経済学者。計量経済学者の卓分け。1902-1929 年コロンビア大学で教える。
- 8) Pierre Simon Marquis de Laplace (1749-1827) フランスの数学者。天文学者。
- 9) Précis de l'histoire de l'astronomie, Paris, V^{ve} Courcier, 1821.

第IV部. 1904-1909

1904年の終わりになるとフランスで、私に対する態度がわずかながら好意的なものに変わったように思う。私は、ルヴァスール氏"が編集長をしているブリュッセルの『国際経済雑誌(Revue économique internationale)』の創立者、P.M.オリヴィエ(Olivier)氏から私の寄稿を求める手紙をもらい(10月21日)、また『形而上学および道徳雑誌(Revue de métaphysique et de morale)』の重役、サヴィエ・レオン(Xavier Léon)氏からは、彼が準備しているクルノーの特集号に寄稿してほしいという手紙を貰った。私は、脳と神経の健康状態が理由で、これら二つの依頼を断らなければならなかった。私の代わりにオプティ氏が、エコノミストであり数学者であるクルノーについての論説を書いたが、それは素晴らしい出来栄えだった。このことについては、私が『ガゼット・ド・ローザンヌ』に投稿して1905年7月13日に公刊された「クルノーと数理経済学」"という論説のなかで述べておいた。

一方、私は私の本と文書が、確実に保存できる場所に預けられていないことを残念に思っていた。私はAとBという二つのノートを作成し、前者には父と私が公刊したもの、あるいは未公刊のもののリストを、後者には私のところにある本と文書に関する指示を書いた。そして、私が会員であるローザンヌのアカデミー協会の事務局が1904年の総会の報告書のなかで、余りに限定された協会の活動を活発にする手段を指示して欲しいと述べていたので、1905年の3月、私はこれら二つのノートを送り、これらを有効に使えばどうかと示唆した。

続く7月9日,協会からは何の返事も得られないので、私はただ単純に文書だけは返して欲しいと頼んだ。私はこの不首尾が、協会の会長であるアンリ・ブラン(Henri Blanc)教授のせいだとは思っていない。彼は、1909年には、大学学長として、私の研究生活50周年祭の積極的な協力者であった。そして私はクルノーに関する私の論説を『ガゼット』に送った。

ある考えが私の頭にあった。それはノーベル平和賞を目指すことである。既にある時期から、 私は、直接税であれ間接税であれ、総ての税を廃止することが自由貿易の絶対的条件であり、自 由貿易そのものが平和の絶対的条件であるということに心を捕らえられていた。私はある「ノー ト」の中で、国家が土地を買い戻す制度によって、ただそれだけでいかに国家が税無しに存続可能であるかということを説明していた。そこで私はこのノートをローザンヌ大学の三人の同僚と友人たちに渡したのである。彼らはノーベル賞委員会あてに手紙を作成し、それが実践的でないとしても少なくとも理論的な努力によってその賞に値すると、私を推薦した。このようなやり方で、つまり政治的デモンストレーションをしたり東奔西走したり会議を開いたりと言ったような努力とは違った方法で、平和のために役立つことは可能なのだということを、その時以来一度も、委員会が理解することはなかったように思う。

1906年になるとすぐに私は、論説「社会的正義と自由貿易による平和」 3 とノートを書き、これを1907年 3 月、ポール・ピック(Paul Pic)氏に『労働法及び社会経済学に関する実践的問題』(Questions pratiques de législation ouvrière et d'Economie sociale)という彼のリヨンの雑誌に載せるように提供した。彼はこれを大変熱狂的に受け入れてくれて、この雑誌の三つの号1907年 6 月, 7 $^{-8}$ 月, 9 $^{-10}$ 月号に掲載し、この論説が同誌上で大いに注目を集めたと私に知らせてくれた。

私の『純粋経済学要論』の第三版と第四版から、どのようにして『要約』を作ったかは(第III 部で)述べた通りである。それを読んで理解するために要求されるのは数学の全く基礎的な知識 だけである。私は1903年、オプティ氏がそれを自由に使えるようにしたが無駄になった。彼から の音信はずっと途絶えたままだったが、1907年8月25日日曜日の午後、散歩から帰ると彼が訪ね て来た。彼は教授資格試験に落ちた後フランス銀行に入り,非常な早さで総務部長と経済研究部 長の地位に就いていた。銀行券偽造事件のことで、ローザンヌに呼ばれ、その機会を利用してク ラランまで私に会いにやって来たのであった。我々の会話を再現するのに必要なスペースはここ にはないが、別れる時、彼はその腕に私の『要論要約』をかかえ、私は彼から、この『要約』を (1)授業を行うためと(2)純粋経済学の基礎的な概論を作るために役立てるという約束を得ていたと いうことを述べておけば十分である。彼は仕事で再びローザンヌへ来るはずであった。そして実 際にやって来て,クラランまで再び私に会いに来てくれた。この間に彼は,ドワン(Doin)が出 版するトゥールーズ (Toulouze) 博士の『科学百科事典』 (Encyclopédie scientifique) の中の『応 用数学叢書』(Bibliothèque de mathématiques appliquées) のための『純理経済学』(Economique rationale) の1巻を書き、これをドカーニュ (d'Ocagne) 氏に原理的に認めさせることに成功し ていた。そして私のほうは,「経済学と力学」かという題の数学のノートを彼に送っていた。そこで 証明したのは,(1)我々の最大満足の公式と天秤の釣り合いの公式とが全く似通っていること(2)我々 の一般均衡の方程式と万有引力の法則とが全く似通っていること,である。彼の二度目の訪問は, 1908年 2 月21日だったが,そのとき彼は,(哲学協会その他の場所で)ともかく基礎講義をするつ もりであり,(純理経済学の巻への序文として,あるいはその他なんであれ)その数学ノートを活 用するつもりであることを私に約束した。

1908年4月6日から12日まで、ローマで第四回数学者国際会議が開かれた。『ガゼット・ド・ロ

ーザンヌ』で知ったところによれば、私の同僚の数学教授、ジュネーブ大学のH.フェール(Fehr) 氏は、数学教育の組織とそれに伴う改革に関して、報告者の間で重要な役割を演じており、クライン (Klein) 氏とグリュムヒル (Grumhill) 氏と共に、1912年にケンブリッジで開かれる第5回目の会議で報告するために委員会を組む事を任されていたので、私は5月14日、私の数学ノートを報告したいと彼に申し出た。彼はそれを承知し、力学の教授であるカイエール教授がに自分でそれを報告するのを許可して欲しいと言って来た。その結果、私は6月16日に、(1)私のノート「経済学と力学」、(2)私の論文「交換の数学的理論」、(3)『純粋経済学要論』第四版を送ったのである。1906年1月10日パリで『月刊雑誌(Revue du Mois)』の第一号が出た。それはフランスの若い大学教員たちが発刊したもので、第一号には、トリノのヴィト・ヴォルテラ氏の「生物科学と社会科学における数学」という、我々の方法に完全に好意的な論説が載せられていた。私はその時から、編集長のエミール・ボレル氏でと知り合いになりたいと思ったが、色々考えた末、待つことにした。1907年の12月末になってようやく、ボレル氏は、私の友人であるジョルジュ・ルナール夫妻にワルラス氏に論説を書いてもらいたいのだがと言って来たので、私は父の伝記を彼に渡す

しかしこの時私には、もう一つの成功がやって来た。7月21日、ローザンヌ大学法学部の比較法学の教授であるロガン (Roguin) 氏と経済学の教授であるボニンセーニ氏®が私に会見を求めてクラランまで来て、大学が私の経済学者生活50周年を祝いたいと思っている事を私に明らかにしてくれたのである。それは盛大な会議を私のために開き、そこでスピーチを交換した後、旧アカデミーの中庭におくための、彫刻家リュジョン (Lugeon) によるブロンズ製の私の横顔と記念の碑文の入ったメダルが州に伝達されるというものだった。全く幸運なことに、私は書類鞄の中に、印刷にまわすばかりの他の草稿と共に、「リュショネ®と科学的社会主義」®という題名の小論をもっていた。その中で私はローザンヌでやり遂げようとした仕事が、かつて私がやってみようと誓った仕事といかに同じであるかということを明らかにしようとしていたのである。

ことにした。彼はそれを大変喜んで受け取り、1908年8月19日号に掲載した。

私は、この小論を二人の同僚に読んで聞かせるだけでよかった。そして我々は意見の一致を見た。その後私が知ることが出来たのは次のことであった。大学がそのような決定に至ったのは、フランスの様々な出版物、特にエミール・ピカール氏¹¹⁾の『近代科学とその現状』¹²⁾という本 (P. 45-1.9) において、私が(1870年から92年まで)講義で行ったような、そしてまた私の後に私の二人の後継者、パレート氏ならびにボニンセーニ氏が行ったような、数学の経済学への適用こそが「ローザンヌ学派」の学説として指定されたという事実があったということである。ところでまさに、リュショネは私を専任教授に任命することで、このような学派が創設されうるのだという希望を表明していたのである。⁽¹⁾

マリー・エスプリ・レオン・ワルラス

(1)「ジャッフェの注]

レオン・ワルラスは1910年1月5日に死んだ。残されたのは、養子のジョルジュ(1857-1934)と娘のアリーヌ(1863-1943)であった。ワルラスは二度結婚していた。一度目は1869年に、セレスチーヌ・アリーヌ・フェルバック(Célestine Aline Ferbach,1834-1879)と、次は1884年に、レオニード・デジレ・マイイ(Léonide Desirée Mailly)とである。ジョルジュの養子縁組のことや、娘アリーヌの誕生日と最初の結婚の日の順序が明らかに逆であることについては、来るレオン・ワルラスの伝記¹³⁾の中で説明するつもりである。ジョルジュには子供がおらず、アリーヌは一度も結婚しなかったので、レオン・ワルラスの家系は今では途絶えている。

1910年1月5日,『ガゼット・ド・ローザンヌ』が発表した死亡記事の一部は次のようなものである。

「今朝は悲報が届いている。レオン・ワルラス氏が今日, クラランの仕事場で, 息子のワルラス歩兵科大尉と娘のワルラス嬢に看取られて息を引き取った。

これは、ローザンヌ大学にとって、またこの著名な学者の数多くの友人にとって、大きな悲しみである。そして経済学にとっては損失である。ワルラス氏は経済学の進歩に最期まで貢献するのを止めなかったからである。

『ガゼット・ド・ローザンヌ』もまたレオン・ワルラス氏に多くのお陰を蒙っている。教授は, 我々の誠実な寄稿者であり、彼が我々の誌面を名誉あるものとしてくれた文芸,文学,科学,経 済学の論説や記事欄は数知れない。

クリスマスの何日か前、彼は我々のところにやって来て、シャルル・ジイド教授およびリスト教授――二人ともローザンヌではかなり有名である――がパリで公刊したばかりの『経済学説史――フィジオクラートから現在まで』いに関する注解を受け取ってもらえないかと言って来た。彼は、この同じ論説の中で、ウィーンのカール・メンガー教授の50周年記念に、敬意を表したいと望んでいた。メンガー教授は、来たる2月23日に、彼の70才の誕生日を友人によって祝われるだろう。

『あらかじめ,私の論説を送っておきましょう』と彼は我々に言ってくれた。『私はもう長くないと思うので、慎重を期します。校正刷を送ってください。訂正出来るかもしれません。』

彼は全く健康そうに見え、いつものように愛想がよく、陽気だったので、我々はその言葉を遮って、このクラランの隠遁者に、もっと健康で長く生きて下さるようにお願いした。

校正刷が我々のところに返送されて来たのは、一昨日、1月3日のことである。

我々は、この論説¹⁵⁾を明日、掲載する。これは、我々の偉大なる友が書いた最後のものである。」 レオン・ワルラスは、1910年1月7日に、スイス、ヴォー州のモントルー・シャトラール市に ある、クラランの共同墓地に埋葬された。

(第Ⅳ部および編者注の訳注)

- 1) Pierre Emile Levasseur (1828–1911) コレージュ・ド・フランスで,経済史,地理,統計学を教える。彼は自由放任の擁護者で,社会主義の反対者である。著書『1879年から現代までのフランスにおける労働者階級の歴史』(1867) などがある。
- 2) 3) 4) これらの論文は、「ワルラス全集』の第7巻(Auguste et Léon Walras, Œuvres économiques complètes, t.VII, Paris, 1987) に収められている。
- 5) Charles Cailler (1865-1922) 1900年, ジュネーブ大学の純粋力学の教授。
- 6) Vito Volterra (1860-1940) イタリアの著名な数学者。トリノ及びローマの高等師範で教えた。
- 7) Emile Borel (1871-1956) フランスの数学者。パリ大学の理学部で教える。1925年には**、**海軍 大臣になった。
- 8) Pasquale Boninsegni(1869-1939)は、パレートの依頼により、ローザンヌ大学で幾つかの講義を行った後、1907年にそこで経済学の教職を得ている。
- 9) Louis Ruchonnet (1834-1893) スイスの法律家。政治家。1883年と1890年の2度にわたり、スイス連邦長を務める。1860年、ローザンヌの租税会議でワルラスを知り、その後パリにたずねる。10年後の1870年、ヴォー州の公教育部長になり、ローザンヌの経済学の講座にワルラスを誘った。
- 10) ワルラスはこれを、このローザンヌ大学で行われた経済学者生活50周年記念祭(Jubilé)で演説した。その後これは『ガゼット・ド・ローザンヌ』(1909年6月11日号)と『社会主義雑誌』(同年7月号)に掲載され、『ワルラス全集』の第7巻にも収められている。
- 11) Charles Emile Picard (1856-1941) フランスの数学者。1886年パリ大学理学部教授。関数と 微分方程式の理論で有名となった。
- 12) La science moderne et son état actuel, Paris, E. Flammarion, 1905.
- 13) この伝記は、ついには公刊されなかった。(本稿の[訳者まえがき]を参照のこと。)
- 14) Histoire des doctrines économiques depuis les physiocrates jusqu'à nos jours, Paris, L.Larouse et L.Temin, 1909.
- 15) この論文「経済学説 (Doctrines économiques)」も『ワルラス全集』第7巻に収められている。

2. リュショネと科学的社会主義

皆さん,

私は今年1909年の終わりには、まさに75才を迎えます。そして私がポーまで父に会いに行って、父の許可を得て、というよりも父の希望に従って、私の最初の経済学上の著作を書くためにパリに戻ったのは、1908年の夏のちょうど半世紀前でした。この著作は、1860年の始めに出版されました。1859年にはすでに、私は『ジュルナル・デ・ゼコノミスト』誌に入っていました。1860年には、私は『ラ・プレス』誌に入りました。同年、私はローザンヌで行われた「租税会議」とヴォー州で開催された「租税問題に関するコンクール」に参加しました。

私達の会議は州の大会議室で行われていました。その第一日目の7月25日の朝,私はル・ヴァランタン(le Valentin)に向かって開かれた窓の前に立っていると、私には何とも表現しがたい安堵と希望の気持ちが心に広がりました。しかし私の傍らにいたエミール・ド・ジラルダン¹¹は、それを明確に表現しました。彼はこう叫んだのです。「ここで呼吸する空気は、自由の空気だ!」科学の自由!それこそが私の熱望していたものであり、私がこの国で完全に見いだすべきものだったのです。

私の意見は会議の大多数の人々の支持を得ることはとても出来ませんでしたが、この会議は何らかの制度や主義に対して賛意を表明するといったようなものではありませんでした。そして私はこのコンクールの賞をとらなかったのですが、賞は誰にも与えられませんでした。こしかしそれでも、私はこの年に、今日の私の地点まで私を導いてくれることになった道に最初の第一歩を踏み出したのです。まず第一に、私はローザンヌの人々の素晴らしく気持ちの良いもてなしを受けました。次に私は、学問的にも個人的にも貴重な友好関係を結びました。私は大衆の強い共感を得ました。私はこれらの証拠を当時の新聞や私の文通の中に残しておきました。だからそれから10年後の1870年6月、パリでルイ・リュショネの訪問を受けましたが、驚く理由は何もありませんでした。当時、彼は公教育および宗教部の長で、ローザンヌのアカデミーに経済学の講座が開設されることを知らせてくれ、私にそれを担当するために応募するようにと誘ってくれたのです。私はそうしました。

I

その結果,1871年10月20日,リュショネは公募試験の後,そしてまた私が非常勤教授として一年間教えた後で,私を経済学の専任教授にしました。その時,彼はそれに手短かに反論するために経験的社会主義を,彼の非常に正確な言葉で,「人間の幸福を達成しようと考えながら,人間を知らない」もの,所有権だけでなく家族や祖国までもを非難して「万人のための福祉と幸福を追求しながら,その目標と全く逆の方向の道を進んでいるように思われる」ものと指摘した後で,

それでもなお社会問題の存在と、それに無関心のままであってはならないというヴォー州の義務 と必要性とをはっきりと言明していました。

リュショネは言いました。「我々はそうあってはならないのです。なぜなら,我々の家を建てたり,我々の衣服を織ったりする人々の地位は,正義と人類の法則がその権利を与えるというようなものではないからです。そのことを認識しなければなりません。つらく,時には危険な労働に捧げられる生活の,つまり我々がどんな犠牲を払っても手放したくないような精神的な喜びからは程遠いところで過ぎてゆく生活の骨の折れる努力が,まれにしか家族の生計や子供の教育や老後の休息を保証出来ないということをよく知るべきなのです。ひとたび事故が起きれば,最も勤勉な労働者が窮乏に陥るのです。

数多くのアソシアシオンが共済に訴えるようになって来ています。これらのアソシアシオンは、 労働者が自らの労働と行動と節約とによって獲得しうる限りの生活の保障を労働者に与えようと 努めています。しかしこのように控え目で慎重な試みよりもいっそう激しくわき起こっている不 平は、もしこの問題の解決がこの方向で追究されなければならないのならば、この道はこれまで よりもはるかに早い歩幅で踏み広げられ、踏み越えられなければならないことを示しているので す」。

そしてリュショネはさらに続けました。

「そしてたとえ我々がこのような義務を前にして、無関心や恐怖のために退却したいと思っても、我々はそうは出来ないでしょう。問題は提出されているのです。最近の痛ましい事件®は更に深刻な事件のまえぶれでしょうが、これらの事件は、長い間抑えられて来た不満が暴力的な突破口を開くのを我々が望まないのなら、平和的な解決を探すようにと我々に大声で命じているのです。

しかしその解決とは何か!と問われるでしょう。私には残念ながら分かりません。そしてそれが分かる人は誰もいないし、それに、思想家たちの中でこの解決案を探究して来た人も殆どいないということに私は気付いているのです。今、ヨーロッパの大国すべてを揺り動かし不安にさせている激しい動きの、最も顕著で同時に最も残念な特徴は、それがいかなる科学の事実にも基づいておらず、またいかなる完全な研究にも導かれていなかったということなのです」。

そして最後にこう言ったのです。

「私はこの点を強調したい。学者は成すべき自分の仕事をしていないのです。あの書斎の沈黙の中に戻らなければならないのです。科学は将来の問題に断固として取り組まなければならないのであり、科学はそれが特権として持つ完全な自由をもって語らなければならないのです。

このような研究すなわち社会的および経済的諸問題の分野における今日の偉大な研究は、どこでなされるのでしょうか。問題が深刻で、今すぐの解決が求められているあの大都会においてでしょうか。私はそうは思いません。敢えて言わせてもらえば、小さな我が国がおそらく社会科学に適した地になるのではないでしょうか。

我が国は平和です。我々の体制は共和制です。我が国民は一般的に裕福なので,他の国で国民を様々な階級に分裂させている闘争のこだましか耳にしていません。我が国なら,自由な研究が楽に感じられるような環境があるのではないでしょうか。私はあると思います。そして,人類の平和と幸福のための実りある解決が,そこから現れ出て来るような学派を開くことはわが国にとっての栄光でありましょう」。

私はまさに、この同じ1871年10月20日の大学の会議で、自分のしゃべる番が来た時に、「経済学の混乱」、その「嘆かわしい現状」を確認しました。そしてその証拠として、私はイギリス学派の主要な定理の一つであるJ.S.ミルの「賃金基金」と呼ばれる定理を挙げ、その全くの無意味さを詳しく指摘した50のです。

このようにリュショネと私は全く同じ意見であり、このような一致には何の不思議もありません。私達は二人とも25才だった時に知り合いました。彼はその時以来私が成し遂げた業績のすべてを知っていました。そして彼が私に、彼の国で政治社会経済学を教えるために立候補して欲しいと言って来たとき、彼は自分の相手の人物を正確に知り抜いていたのです。だから私は呼ばれたのです。私がローザンヌにやって来たのは、社会の不正義に対して、慈善や保険やアソシアシオンなどという対症療法を探して勧めるためではなく、社会問題をその真の観点に据えて、出来ればそれを科学的に解決するように努めるためにです。私は、このことで困らせたり、怒らせたりしたかもしれない人々に対しては、大変悪かったと思っています。しかし私が行ったことに関しては、私にはそれを行う絶対的な権利があり、また敢えて言えば、それを行う厳正な義務があったのです(拍手)。

II

私の任務は重いものでした。社会科学の中の経済学的な部分は、実際にはその対象とその性質とによって異なる三つの科学を含んでいます。それは、1.純粋経済学、すなわち組織された自由競争(これは単なる自由放任とは全く別の物です)という仮定的な制度のもとでは、社会的富の交換、生産、資本形成、流通がそれに従って行われていくような、いわば自然的で必然的な法則の研究、2.社会経済学、すなわち社会的富の分配をつかさどるべき道徳的法則の探究、3.応用経済学、すなわち社会的富の生産がそれに従って行われるべき効用の基準の探究、です。ところで私は、これら三つの科学のうち第一番目のものが無ければ、後の二つも存在しないと考えていました。

《純粋経済学》 ——私が、1870年の12月に非常勤の教授として教壇に立った時には、優秀かつ無名の大家であった父の業績と発見に関する手ほどきを子供のときから受けていたことを別にしても、既に12年間を政治社会経済学に捧げていました。だから1871年の10月に専任教授になったときには、私が数学的形態という厳密に科学的な形態で作りたいと考えていたような純粋経済学の二つの鍵のうちの第一のもの、すなわち「交換の方程式」をもうつかんでいたのです。そして

1872年中には、私は2番目の鍵、すなわち「最大満足の方程式」を発見していましたが、ジェヴォンズの方もイギリスでそれを発見したばかりであることをすぐ後で知りました。私の競争相手に追い付き追い越すために、私は少し急ぎ、1874年と1877年に『純粋経済学要論』の初版を出版することに成功しました。その中には、自由競争における1.商品の価格、2. 生産物と消費および生産用役の価格、3. 純収入率とその結果としての資本財の価格と、4. 貨幣の価値、5. 経済進歩の条件と結果、6. 公定価格、独占、税の効果とを決定する数学的理論が含まれています。

このような研究すべての主要な結論は今日では、科学研究が自由で活発な国々では一般に認められています。つまり、自由競争はそれが組織され行使され得る場合には、用役と生産物の効用の最大量を得るということです。この効用の最大量は、稀小性あるいは満足させられた最後の欲求の平均強度に対して価値が比例するということの結果として生じたものです。ただしそれは、各用役あるいは生産物が、需要と供給の等しい市場ではただ一つの価格しか持たないという条件の範囲内でということです。すなわち、社会経済学で決定すべき所有の条件や応用経済学で決定すべき独占の組織については考慮されていないのです。この新しい数理科学を、イタリア人は最初に受け入れ、それを純粋経済学(economia pura)と呼んでいます。イギリス人とアメリカ人は純粋経済学(pure economics)、ドイツ人は純粋(reine)あるいは理論的国民経済学(theoretische National—Œkonomie)と呼んでいます。

《社会経済学》 — 純粋経済学は私が先程定義したように、自由競争というゲーム・ルールによって物の価値はその稀小性に、言い換えれば総ての消費者の満足させられた最後の欲求の平均強度に比例するということを論証することにより、社会経済学の経済学的基礎を与えます。なぜならそれは、古典派経済学の主張に従い、バスティアのの主張とは反対に、社会的富には二つの自然的な種類のもの、すなわち 1. 土地と 2. 人的能力があるということを、そしてさらに、狩猟と漁業の体制から牧畜、農業、工業、商業の体制へと次々に移って行く進歩する社会においては、後者の価値は必ずしも変化せず、前者の価値は必ず増大して行くということを論証するからです。

しかし、社会経済学には道徳的な基盤が必要です。あらゆる学派のエコノミスト達の観点とは 反対に、現実の人間は社会においてのみそして社会によってのみ存在するのだということを確立 することによって、道徳的基盤を与えるのが道徳哲学です。個人と国家という、抽象的だが共に 自然的な二つの社会的類型が存在することになり、それらが富の分配における受取人として認め られることになります。そしてそれゆえに、社会的正義が、土地は国家に帰属させ、人的能力は 値人に帰属させることを要求することは明らかです。所有と税という二つの問題はこのようにし て同時に解決されるのです。

この点に関して、私達はかなりの数の権威をもっていますが、特に次のような権威をもっています。この本はあらゆる言語に翻訳され、教権政治体制に従う国民にとっては市民的かつ政治的な規範でありました。そしてこの権威は自らの役割と性格に適した言葉で、次のように言ってい

ます。「土地は絶対に売られてはならない。なぜなら土地は私の物であり、あなたがたは私のところでは異邦人でありよそ者だからである。」(『レビ記』", XXV, 23)

私達はここで社会的正義の観点に立っています。社会的利害の観点に立てば、土地の共同所有は耕作の必要に応じて土地を大中小の農地に分割するのに向いており、それがどれほど個人的所有に勝っているかということが容易に分かります。個人的所有はそれが相続財産の分割と組み合わさると、例えばフランスのような一国の領地を1億2500万以上の小農地で構成され、しかも平均で10の、そして場合によっては100の孤立した小農地を含む農場に分割するという悲惨な結果に至るからです。ではこのようなことはどこまで行けば止むのでしょうか。農学者達はこの点を問題にしています。

それだけではありません。純粋経済学は正義と経済的利害を実現する手段を同時に私達に与えます。価値は稀小性に比例します。ところで稀小性と、従って土地の価値とは社会の進歩と共に絶えず増加します。だから、ゴッセン®が考えたように、進歩する社会においては、国家が地代の増加分で土地の買上げ価格分を償還することによって少しずつ土地を買い戻すことが出来るのです。この点に再び戻りましょう。

《応用経済学》――純粋経済学が道徳哲学に助けられて社会経済学を生み出すのと同様に、さらに純粋経済学は社会経済学に基礎をおき、貨幣、独占、農工商業、短期および長期信用、投機に関する問題の解説のために、応用経済学に道を開くのです。この点に関して、私は賃金と自由貿易という二つの問題にのみ触れることにしましょう。

まず第一に、ストライキや工場閉鎖などの手段による賃金の決定は、言い換えれば結局は銃撃に対して石を投げ返すようなもので、野蛮なやり方であることは確かです。しかしこのようなやり方の代わりに、競り売りと安売りのメカニズムによって様々な労働の価格を定めるやり方を用いるためには、数学的な純粋経済学が絶対必要であることもまた確かなのです。

次に、生産物の無制限な自由貿易が世界中の国々に効用の最大量を得させるということは、それが各国間の人々にそれを得させるのと同様に確かです。しかしそれに劣らず確かなことは、無制限な自由貿易は、保護主義的な税だけでなく、消費にかかる間接税であれ収入にかかる直接税であれ、単なる国税についても総ての税を完全に撤廃することを必要とするということです。そして実際に、外国製品の輸入を奨励する時には、同じように自国製品の輸出も奨励しなければなりません。なぜなら輸入品を支払うことが出来るのは、輸出品によってのみだからです。それはまず何よりも、国内の生産用役が輸入産業から輸出産業に流れるのを妨げてはいけないということです。しかしそれはまた、収入にいかなる直接税も課さないことによって、貯蓄による自国資本の創出と増大を奨励しなければならないということでもあるのです。つまり一言で言えば、国家財政家たちの限りない創造力のたまものである私達のすべての税は、正義の観点から見ても利害の観点から見ても、いずれも同じように有害なものであり、社会経済学の結論に従うのと同じように応用経済学の結論にも従って、順次廃止すべきであるということです。

さて、理論から実践に戻るとしましても、無制限な自由貿易は国家による土地の買い戻しを前提とします。そしてこれら二つの政策は、同時に実施されてそれでうまく行くでしょうし、またそうでなければなりません。このようにして実現されれば第一の政策は国家に損害を与えることはないでしょう。国家は輸入産品を産出する一定の土地の地代の損失を、輸出産品を産出する別の土地の地代の利益で埋め合わせるであろうからです。また労働者に損害を与えることもないでしょう。彼らは次第に輸入産業から輸出産業に向かいさえずれば良いからです。

Ш

というわけで、土地の買い戻しが税の撤廃を可能にするでしょう、そして、税の撤廃が自由貿易を可能とするでしょう。いやそれだけではありません。自由貿易は戦争の廃止に通じるでしょう。なぜなら平和は自由貿易の必須条件であると同時に、その必然的結果でもあるからです。こうして世界に一種の経済的統一が確立されるでしょう。それは宗教的ないし詩的な観点あるいは政治的または法的観点からみた国家の多様性や独立性を、少しも害することはないでしょう。こうして、かの平和の理想が実現されるでしょう。人類はヴェルギリウスッが彼の第四田園詩(IVe Eglogue)でそうしたように、進歩と幸福の夢想の中でもうずっと前から、多少ともはっきりとこの理想を予想してきたのです。そして今日、人類はこんなに平和の理想を渇望し始めているのです(長い拍手)。

ここで私は、社会問題が解決されそして自由貿易によって平和が確立されれば、国家が年々、 陸海の戦争の有害でかつ破滅的な活動から平和と正義の実り多い活動に振り向けることが出来る ようになる数十億フランを計算してみせるという、比較的簡単な仕事を他の人々にお任せします。 以上が私の到達した社会主義です。それは科学的で自由でかつ人道主義的な社会主義です。リ ュショネも同意してくれただろうと私は信じています。私は、彼が科学にその「特権」を与え、 彼の後継者たちもまた決して私に対して惜しまなかった、あの「完全な自由」をもって、私が社 会主義を語り続けることを私に許してくれたであろうと確信しているのです。

かつて自然科学の領域で地球の運動や血液の循環の発見以来生じたような常識という大きな幻想の転換を、私達がまもなく、個人と国家の性質と両者の関係とに関して道徳科学の領域で目撃することになるだろうと言うことは、総てのことが示しているように思います。現実の人間が、その個人的意志も彼が生きる社会の環境も排除するような産物ではないということ、つまり彼はこれら二つの構成要素、すなわち彼の意志と彼の環境との一所産であり、従って国家の中の個人であるということは、明瞭にお分かりでしょう。しかしこの転換は、政治社会経済学においては、天文学や生理学においてよりも、どれほど長く、かつ困難なことでしょう!

私達の世界は未だに存続している不正義と無秩序のまさしくそのせいで、満足しきった保守主 義者たちと短気な進歩主義者たちに分かれています。 前者は、社会が全く改革される必要がないと考えるもっともな理由をたくさん持っていまして、彼らは社会問題を巧みに避けたり、はぐらかしたりすることを特に任務とする科学を教えたり、教えさせたり、それに補助金を与えたり奨励したりしています。これが官製の科学です。最近までそれは、土地に価値があるということを大胆に否定し、個人こそが唯一の社会的存在様式だとはっきりと主張していました。そうしておいて官製の科学は総ての富を個人的所有に委ねるでしょう。それは単純で、かつ決定的なことでした。今日では、このような否定と断言は科学的には支持されなくなりました。それは社会経済学の方法をもたず、富の分配の問題を除外しているのです。——ただそれだけのことです。様々な問題、例えば食料品やその他の消費物の店を開くとか、大企業がその従業員のために安い家を建てるとか、労働者が雇用者の利益配分に預かるとか、購買者の同盟や協同組合や保険の相互組織を作るとかなどの問題を、富の分配の問題にかかわらせようとしているのです。本当の重い病気には目をつぶって、たいていはこの病気そのものの偶発的な症状に甘んじることに決めた医者たちは、こんな風にするのでしょう。

逆に短気な進歩主義者たちは、社会をまったく不完全な物と考える立派な理由をもつ人々です。 だから彼らは人間の本性と社会的富の本性に関する体系的で掘り下げた研究以外のところで、改 革の計画を思い描いているのです。そして彼らは、今日明日にも社会主義体制を資本主義体制に 代わるものとしようとし、直ちにその計画の実行に参加する人々を、かなりいいかげんに探して みつけだすのです。こういうことで、経験主義的政治というものが生まれて来るのです。このよ うな政治の本質は、理論的には解決されない諸問題を実践的に解決しようという点にあります。 解剖学や生理学や病理学を知らずに医学的な手術に没頭する臨床医のようなものです。

このようなことはすべて、大きな国々で見ることができます。私に関して申しますと、私がヴォー州とスイスに対して抱いている感謝と愛情から、私はヴォー州とスイスには二つの伝統、すなわち自由な科学と合理的な政治をぜひとも固持して欲しいと願っているのです。そして私はこれからあえて言わせてもらいますが、私は、リュショネが望んでいたであろう「人類の平和と幸福のための実りある解決策がそこから現れ出てくるような学派を開くという栄光」をこの国に与えようと力の及ぶ限り努力しました。(将来はそれが成功だったと言ってもらえるでしょう。)

まず第一に科学を自由に行うこと、そして次に政治を合理的に行うこと、すべてはそこにあります。私は第一の活動についてはお話しました。政治の領域を侵すことのないように、またそれがもつべき厳密に科学的な特質をこの仕事にすべて任せることにし、二番目の活動について一言、述べる必要があるように私には思われます。それは、少しずつ国家に再び土地を所有させるということにあります。

新しい経済学は、いわゆる「人口と生活資料について」のかつての問題を完全に解明しました。この問題を、中国人は新生児をなくすことによって、まったく不完全にしか解決しませんでしたが、この問題は「限られた国土で、すでに工業および商業の体制に達して増大する人口をますます安楽に養うにはどのようにすれば良いか」というように提起されています。新しい経済学は、

これには二つの手段がある事を教えています。1. 貯蓄により生産資本の量を増加させること。これは経済的進歩を生じさせます。 2. 科学によって、生産資本の質を改善すること。これは技術的進歩を生じさせます。これら二つの進歩がまず生じれば、その後では、人口の増加は何の不都合もなく起こりうるのです。

しかし同時に、最も重大な結果が生じます。数学的な純粋経済学はそれを次のように言うのです。進歩する社会において土地の賃貸料すなわち地代は、土地の量が増加しないので、かなり上昇する10°。そして、推論によって証明され、経験によって確認された、このような状況においては、国家は十分な期間を経た後に、一文も払わずに土地を再び所有することが出来るでしょう。

国家がこのような期間の初めに、目下プロシャ国家がポーランドの農民から土地を収用するために行っているように、次々と国債を発行することによって土地を買い戻し始めるにしても、国家は増大する地代によって、これらの国債を少しずつ償還するでしょう。100年、150あるいは200年という期間を経れば、国家はその自然権を取り戻して、どんな種類の税もなしに、特に輸入関税はなしにやっていけるでしょう。

では地主たちはどうなるのでしょうか。彼らは、ポズナニのポーランド人たちがその場所をドイツ人の占領者たちに譲るためにそうしたように、アメリカに移住したりは絶対にしていないでしょう。彼らのうちで耕作をしないものたちは、もし彼らが望むなら、前もって更新可能な長期賃貸借契約によって、上昇する地代分は払うという条件つきで、彼らの館と庭園つまり自分の家と庭で生活する資本家に変わっているでしょう。また耕作する地主たち、すなわち最も興味深い人達は国家のフェルミエになっているでしょう。彼らは土地を販売したおかげで、そしてその代価によって集約農業を実行し、この耕作によって私達に安価な生活を与えてくれると同時に、彼らも豊かになるのです。

二重の状況がこのような進展を容易にすることでしょう。それは貯蓄に好都合な平和の時代と 対学におけるある偉大な発見です。19世紀は蒸気において後者をなしとげました。戦争で浪費した資本をもってすれば、19世紀は至るところで土地を国家に返すことが可能だったでしょう。私達の、始まったばかりの20世紀には電気があります。もし20世紀が平和に徹したいと考えるのなら、それが社会問題の解決を妨げるものは何もないでしょう。そしてスイスは鉄道網の中心として、また西ヨーロッパの主要な諸民族の接点としての独特の立場によって、すでにその人口や面積とは比べものにならないほどの経済的および政治的重要性を与えられています。スイスは中立で自由で立憲制ですが議会制ではありません。スイスはその氷河と水流とにより水力と電力の莫大な貯蔵所でありますし、今この時にもその専売権を共同体のために保有しておくように留意しています。そして最後に、スイスはさらに利害を超えた科学的思索を受け入れ、それを尊重するという稀なる賢明さをもっているのです。このスイスは、水力エネルギーの料金によって容易に土地を買い戻すことが出来るでしょうし、そしてそのようにして、文明の次の輝かしい段階の先頭を切って進む事が出来るでありましょう(繰り返される拍手、長い喝采)。

(「リュショネと科学的社会主義」訳注)

- 1) Emile de Girardin (1802-1881) フランスのジャーナリストおよび政治家。数多くの新聞を創刊したがその中には、ワルラスのいた『ラ・プレス』(1836年創刊) も含まれている。
- 2) この時の審査委員会は、予定していた一等と二等の賞を取りやめて、五人に選外佳作賞を与えたのだが、その五人の中でのワルラスの順位は第四位であった。ワルラスが「自伝ノート」の第 I 部で、「四等賞」をとったと述べていたのはこのためである。ちなみにこの時第一位だったのはプルードンであった。(Cf. Correspondence of Léon Walras and Related papers, edited by William Jaffé, vol.I, Amsterdam, 1965, p.99)
- 3) パリ=コミューン(1871)のことであろう。
- 4) Cf. 「1871年10月20日の大学の会議における経済学専任教授就任演説」("Discours d'installation en qualité de professeur ordinaire d'économie politique prononcé dans la séance académique du 20 octobre 1871", Auguste et Léon Walras, Œuvres économiques complètes, t.VII, Paris, 1987.)
- 5) ワルラスの, J. S. ミルの賃金基金説に対する批判については,『純粋経済学要論』第40章,「賃金および利子についてのイギリス学派の理論の解説と批判|も参照のこと。
- 6) Frédéric Bastiat (1801-1850) 自由主義経済学者で保護主義に激しく反対した。1846年には「交換の自由のためのアソシアシオン」を設立。主著に『経済的調和』(1850) がある。
- 7) レビ記 (Lévitique) モーセ五書の第3の書。神への犠牲の供物、祭司の聖別、清い生活、祭儀に関する諸規定が解かれている。
- 8) Herman-Heinrich Gossen (1810-1858) 『社会的交通の法則およびそこより演繹される人間活動の規則に関する説明』(1854)を著し、限界分析の先駆者として有名である。ワルラスとゴッセンの理論的継承関係については「知られざるエコノミスト、H. H. ゴッセン」、「地価および国家による買い戻しに関する数学的理論」(共に『社会経済学研究』(1896) 所収) などを参照のこと。
- 9) Virgile (紀元前70-19) 古代ローマ最大の叙事詩人。『田園詩』,『農耕詩』,『アエネイス』など の著者。
- 10) この法則については、『純粋経済学要論』第36章、「限界生産力の定理。生産物の量の増加について、進歩する社会における価格の一般的変動の法則」を参照のこと。

(一橋大学大学院博士課程)

ー橋大学社会科学古典資料センター Study Series. No.25

発行所 東京都国立市中2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1991年 3 月30日

印刷所 東京都八王子市石川町2951-9

三省堂印刷株式会社

